第二十八回

教師が子どもの心を映し出す鏡になれば クラスは輝き始める

文｜toshi
イラスト｜秋野 純子

もう四十年くらい前のことです。梅雨の長雨が続いていました。うっとうしい空模様でしたが、子どもたちは落ち着いて過ごしていました。

そんな折の休み時間のことです。職員室で仕事をしていると、数人の子どもたちがあわただしくやってきて、口々に「toshi先生、大変だよ。Aさんが手にけがしちゃった」「Bさんがね、コンパスの針で刺しちゃったの」と訴えてきたのです。

教室に向かいながら話を聞くと、Bさんが手にコンパスの針を見えるように持ち、友達をおどかして回っていたところ、何も知らずに教室に入ってきたAさんがコンパスに気づくよりも早くBさんの手を払いのけたため、先端がAさんの手に刺さってしまったとのことでした。

教室に入ると、すでに保健係がAさんを保健室に連れて行っていました。Bさんのいつものひょうきんさは影をひそめ、神妙な表情で席についていました。わたしはそれまでの教室の雰囲気を知りたくて、全員を着席させ、話を聞くことにしました。

○話し合いの行方は

「Bさんがいけない。何もおどかすことはない。みんなやめろよと言っていたのだから、けがさせる前にやめるべきだった」。みんなが一致してそんな話に終始したので、わたしはBさんをかばうことにしました。

「そんなに一方的にBさんがいけないかなあ。別にけがさせようと思っていたわけではない。ただおどかそうとしていただけでしょう。だからと言って、Aさんが悪いということはない。これは仕方ない、誰が悪いというわけでもない。運が悪かったということではないかなあ」

「そんなことないよ。コンパスを持っていた方が悪いに決まってるじゃん」

「それに、何もおどかすことはないでしょ」

子どもたちの声から、やはりBさんを一方的に攻める方向になるのかと思ったとき、CさんがBさんを少しかばう発言をしました。

「確かにBさんがいけないと思う。でも、先生の言うことも少しわかる。A

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。
それは子どもたちにとって最大の魅力。
「さあ！ その若さという武器を最大限発揮しよう」
toshi 先生から新米先生へのエールです。

＜ toshi 先生プロフィール＞
子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切にし、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35 年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

さんがけがしたとき、Bさんはびっくりしていたよ。『うわあ、大変なことになっちゃった』って思ったからじゃないの。まさか、Aさんが自分の方に向かってくるとは思っていなかったんでしょ」

続けてDさん。まったく視点の異なる発言をしました。

「ぼくはね、みんなもいけなかったと思う。確かに『やめろよ』って言っていた子は何人もいたけど、ぼくも含めてみんなニヤニヤ笑いながらだったよ。本気になって注意した子はいなかったと思う。だから、Bさんはおどかすのを続けちゃったんじゃないの。もっと真剣に言えばよかった」

そんな話の最中、けがの治療が終わったAさんが戻ってきました。Aさんはしばらくみんなの話を聞いていましたが、突然挙手して発言しました。

「いけなかったのはわたしなの。Bさんはただおどかそうとしていただけなのに、わたしがよく見てなかったから、わたしの方からけがするように向かって行っちゃったんだ」

そのときです。Bさんは突然机につっぷし、大声を上げて泣き出しました。みんなは驚きのあまりBさんを見守るしかありませんでした。その光景に感動したのか、クラスの中には下を向いて体をふるわせている子どももいました。

わたしも含め、全員無言でBさんを見守りました。しばらくたって、隣の席のEさんがBさんの背中をさすりだしました。その様子に、かすかだけれど、温かな笑いが起きました。

○クラスの問題を自分の問題として捉える

それからというもの、Bさんのひょうきんさは、大きく変わり……ませんでした。相変わらずふざけたり、問題になる行動をとったりしています。しかし大きく変わったことがあります。友達の注意をしっかり聞くようになったのです。

もう一つ、特筆すべきことがあります。この事件をめぐる話し合いのとき、「自分には関係ない」とばかり、話し合いに参加せず、ひたすら読書にふける子どもが数人いました。しかしそのような子どもたちも、話し合いの途中からは、友達の話に真剣に耳を傾けるようになりました。そして、この傾向はその後も持続するようになったのです。「クラスの問題は自分の問題」そう捉える子が全員になったというのは、うれしいことでした。

そう。一人の子どもの問題行動は、その子だけの問題ではありません。その行動にクラスの子たちがどう関わるか。無視するか、問題として捉えるか。問題だと捉えたとしても、それにどう接するか。批判一辺倒か、それとも問題行動のなかにも心和む言動があることを見抜くようになるか。その積み重ねは一年もたてば大きな心の成長として現れます。

最後に、担任としての接し方ですが、この種の問題行動に対し、一方的にお説教しても、むなしさだけが残ってしまうことは多いのではないでしょうか。

子どもたちは、何がいけないかはわかっています。わかりながらもやってしまうのです。教師が、その時々の子どもの心を映し出す鏡になってあげれば、子どもたちは、自分の姿を見つめ、やがて自分たちで問題を解決していくようになるでしょう。